○仕損じたか殘念ッ

先き廻りして目黒不動尊の近邊にきたり、新八郎は附近の小さい宿に泊り込んで、上から下まで黒裝束、覆面頭巾の忍びの姿、その日の至るを待つてゐると丁度その年秋の末であつたが、將軍家光公お忍びといふので鷹狩に出られたいくらお忍びといつても流石は將軍家だ、お傍近くには毛利秀元、水野監物、柳生但馬守、秋元但馬守、向井將監、忍術遣ひには、雲霧三平、霧右近等、その他屈強の旗本三四十騎從がひ、先づ目黒の不動尊に參拜して、その前の野原で鷹を放つて興がられ、將軍家に於いても自から弓矢を持つて小鳥を射つけられる。此方小さな池の側、大なる立木の側に身を潜めて隱れてゐた野々村新八郎、忽ち九字を切ると、水中より一羽の鶴がフワリとび出でた、それと御覽なされた將軍家光公、家「オヽ珍らしき鳥よ、予が射止めてくれん

と、弓に矢を番へタッ……と駒の首をその方向に向けて走らせた、ときに誰れいふとなく、△「上様……お止めなされませ……」と、止めるも聞き入れず、件の老松の側まできたとき、新「アイヤ、將軍家光公、憚かりながら御首級頂戴いたす」と、大首に呼ばりながら、パラリ躍り出でし野々村新八郎忽ち將軍家望んでズバーリ斬りつけた、瀧石は三代將軍徳川家光公、柳生、小野等の仕込みの、前腕、ハッと思はれたが、家「無禮者ッ」と、持つた弓でビシーリ拂はれ、新八郎もその腕に打たれ二の太刀斬りつけるを、又も弓を以つて拂ひ退けると、弓はバッチリ二つになつたとき、早やくも駈けつけきたつた柳生但馬守、但「狼藉者奴ッ……」と、ズバリ抜き打ちに斬りつけた、カチーンと受け止め、尚且も將軍家に斬りつけんとしたとき、早やくも近づいたる大勢の近侍、一甲「それッ曲者、召し捕れッ……」と、群がりかゝる、新「ウム、仕損じたかッ、殘念ッ……」と、身を躍らして池の中へドブ

ーンとさび込んだ、乙「ヤアさび込んだぞ、逃がすな〳〵」と、一同ゲルリと集まつたが、流石は忍術家がゐる、曲者は忍術遣ひなるぞ、あれ彼處に〳〵……」と、パラ〳〵ッと追ひかけたが、悲しや多くの人々にはその姿が分らない、忍術遣ひはドシ〳〵追ひかけてゐる間に、將軍家は柳生その他の人々が附き添ひ、鷹野は中止として、早やくも品川御殿へ引きあげられ、それ〴〵役人に傳へて曲者召し捕方を命ぜられ、それより多くの供人に警固せられ、千代田城へとお歸りになつた、此方新八郎はドシ〳〵逃げ出したが忍術遣ひが先き立ちになつて多くの旗本が追ひかけてゐる、新八郎は二三度水中へさび込むとみせかけて逃げ出すが、忍術家の目は胡麓化すことが出來ない、最後に一つの川のところへ出たので、得意の水遁の術、ドブーン、とゝぴ込み、水底を潜つて下流〳〵へと流れた、これには忍術家も目を晦まされ、

甲「オ、いよ〳〵さび込んだか、汝れッ……」と、一人が九字を切ると、そ

の邊の水は渦まき返つてキリ〳〵と舞ひ出し、多くの魚などフナ〳〵になつて出たが、肝心の曲者は出ない、かゝる奴は多く水流に逆上るものであると、上へ〳〵と探した、それと反對に新八郎は下流〳〵へと行き、ヒョイと首をあげると上流の方で人聲が聞へる、占たと上なる黒裝束を脱ぎ捨て、縞の着物になつて悠々と引ッ返した、一寸みたところ俠客用の町人、然し何しろ水でケッスリ濡れてゐるので寒い、急ぎ今まで泊つてゐた小宿へ立ち歸り、預けてあつた着物と着換へ、大膽不敵にも江戸の町へ入り、日本橋の宮田の道場へ立ち歸つた、實に驚嘆下噴しの譬への通り、目黒附近は闇もなく役人を以ゴて蟻の這ひ出る隙もない位いであつたが、どうしても曲者の姿もみへず、一同は不思議〳〵と首を捻つてゐた、サアこの噂さが江戸中の大評判、宮田の道場でも門弟が集まるとこの噂さ、甲「何んと、上樣に狼藉な働らいた奴は何ものであろう……、乙「サア矢ッ張り豊臣殘黨のものであろう……、丙「然し今更ら

豊臣殘黨の者が騒いでもどうなるものでもなからうに……、甲「然し素藏な忍術の名人だそうではないか、あの鼠霧殿や霧殿さへ遂に見遁したといふ位いだ、乙「そうだ、何んでもその曲者さ過日大久保御老公の頭をブン殴つた奴と同じだろうといふ評判だ、丙「なる程、そういへばそうかも知れん……では其奴がウロ〳〵してゐるのか、どんな奴か顔さへ分れば拙者が引つ捕へてやろに……、甲「そうぢやノ〳〵、然し何んでもまだ目黒から大森にかけては役人が網を張つてゐるそうだぞ」と、ワイ〳〵いつてゐる、奥で宮田相手に酒を飲んでゐる野々村新八郎には手にとるが如くに聞へる、その後聞もなく、過日上様に猥藉働らきし曲者を捕へしものには千両……、その所在を密告したものには百兩遣はすといふお觸れが出た、五一先生、何んと面白いお觸れが出たではございませんか……、新ハヽアどんなお觸れで……、五「先生もお聞き及びでございませう、先生がお帰りになる日、云々斯々の出來事が

あり、その曲者を捕へたら千兩、密告したものには百兩遣はすといふお觸れでございます、新「ホヽオ……、それは又大變なことで……、余程の曲者とみへますな、五「それは何んでも忍術を心得、殊に水中に這入つたらどうしても分らんといふ奴、過日大久保御老公のお頭を殴つた奴もそれらしいので、……近頃その曲者の大評判でございます……、新左様か、それは面白いことで……誰れが引ッ捕へるでござろう」と、いヽ加減なことをいつてゐるその後十日ばかりして、新八郎は只だ一人ブラリ深川の不動尊に參詣に出かけ社前に參拝して、入口の茶店へ這入つて腰打ちかけて一杯飲つてゐると、奥で飲んでゐた三四人の客、女「どうぞ又お近い内に……」と、女中に送られて出てきたのは、何れも町奴風の男、先きに立つたのは、年頃五十前後、色の淺黑い親分風の男、後はその男の子分らしい、新八郎何氣なくヒョッとみると、その男の右の横鬢に大きな禿かある、思はずアッと叫ぶと、三人はヂ

ロリ後方を向いたが、その儘彼方の方に立ち去つた、新「ハテナ……、オイ〳〵女、女「ハイ、新「今歸つた男は一体何者ぢや……、女「あのお方でございますか、あれはこの深川で黒駒の新右衛門といふ親分さんで、後の方は子分衆でございます、新「フム……町奴か、たしかその新右衛門といふ男には橋鬚に禿があつたであろう、女「ハイ〳〵、禿があるので、人さんは禿新〳〵と仰しやいます、新「フム……、して家は何處だ、女「イヱの先の龜住町でございます……」いろ〳〵聞いてみると、以前は何んでも中國邊の生れとばかり、後は分らない、新八郎も茶店を立ち出で、龜住町近くへくると件の三人は兎あろ一軒の家へ這入つた、家は俠客風の小意氣な家だ、新「ハテナ……年頃といひ、あの禿といひ、もしや尋ねる傳助といふ奴ではないかしら……」と、いろ〳〵老がへながら後へ引返し、早やく永代橋近くへると、突然、甲「御用だ、神妙にせいッ」と、ドッと組みついてかゝつた、

新「無禮者ッ」と、いひながら、二三人引ッ掴んでドッと投げつけた。

○又飛び込みアがつたな

役「御用だ、神妙にせいッ」と、四方八方から役人らしき男がどり圍んだ、新「さては露現に及んだか……」と、思つたがワザと素知らぬ顔で、新「無禮なことを申すな、我れは不淨の繩を受ける覺へはない、人違ひして後悔すなッ」と、いふと、ポイッと現はれ出でた一心太助、太「ヤイコラッ……今更ら逃げやうたつて、もう遁すがもんか、手前ねに違ねね、何時か萬世橋で親分の頭をブン殴りアがつたのは手前ねに違ねね、サアグズ〳〵吐かすお役人の御繩頂戴しろッ、新「默れッ下郎、拙者はそんな覺へは少しもない、太「吐かすな、いくら隱したつてその聲が承知しねね、サアお役人、早やいて頼みます也、乃公も加勢するから……」と、例の通り向く鉢巻きで天秤棒

を振りあげて打つてかゝる、新「無禮いたすなッ」と、四方八方に投げとばすが、役人はだん〳〵に集まつてくる、それ彌次馬が加勢するので、面倒と思つたか新八郎は永代の橋の上まで遁げ出し、役「それッ遁すなッ」と、いふ間に欄干に手をかけるよとみる間に、水中へドブーン、太「ヤア失策つた、又とび込みアがつたな」と、大騒ぎをやつでゐる、その間に新八郎は早やくも日本橋の宮圍の道場へ立ち歸つた、考がへると、どうも彼の黒駒の新右衛門といふ奴が傳助といふ奴に違ひないと思はれるので、これは何んでも一つ彼奴の身の上を探つてやらうと、宮田五郎兵衛、その他一同に、これより奥州邊を漫遊しやうと思ふ、ついては暫時お別れすると、一同に別れを告げて道場を立ち出でた、それより永代橋の橋詰の紀の國屋三助といふ宿へ泊り込んで、それとなく黒駒の身の上を探ると、以前は大阪邊の者と知れた、新「いよ〳〵彼奴が傳助に相違ない、然し彼奴飽くまで身の上を隱してゐるところをみると、もしや彼

奴が母を殺したのかも知れぬ、どうして白狀させてやらう」と、いろ〳〵思案してゐたが、幸はひ新左衛門は老年に似氣なき好色老爺で、その頃深川八幡前に白清といふ料理屋があつて、其處に多くの內藝者がゐたが、中でお濱といふ評判の美人に現をぬかし、毎夜〳〵通つてゐるが、お濱は名題の男嫌ひ、ナカ〳〵首を縦に振らない、新左衛門どうかして我が意に從がはやうと逆上切つてゐると分つた、其處で新八郎も素より酒は好物、早速出かけて行つてお濱といふ女を呼ぶと、年頃二十一二、江戸前のスッキリとした勝氣らしい女、三四度通ふ內に、スッカリ馴染になつた、新八郎は色こそ少し淺黑いが、流石一萬石の愛妾の胤だけあつて、目鼻立ちキリ〳〵ッとして、まだ年若の二十一才、合縁か奇縁か、男嫌ひのお濱も何んとなく憎からぬ樣子がみへた、それと知るか知らずか、或る日新八郎はお濱に向ひ、新「お濱どの、拙者其女に折り入つて頼みがあるが、何んと聞き屆けてはくれまいか」と、切り出した、お濱も

厭でもない男にそういはれて顔を少しポッと赤くして、濱「してそのお頼み
といふのはへ……、新「外でもないが、これは他言を憚かること……其女
の客に黒駒の新左衛門といふ客があろう……、濱「ハイ、あの厭らしい老爺
でございますか、新「左様、彼奴は以前大阪の云々いふ人の家來で傳助、して
その主人の供をして丹後に參つたのであるが、途中でその主人を如何いたした
か、聞いて貰ひたいのぢやが、どうぢや、濱「ではその主人といふ女のお方
は、貴君の母御か何かでございますか、新「少々縁戚のものぢや、彼奴が名を
隱して當地にゐるところとみれば、殊によつたら大膽にも主人を殺しはせぬか
と屈ふが、それを聞いて貰ひたいのぢや……、濱「そのやうなことは何んで
もございませぬが、もしその御用を果したら妾しを可愛がつて下さるかや」と
耻かしそう、新「それさへ果してくれなば、其女を厭がるところではない、厚
く禮をいたす……、濱「なんの禮などは入りませんが、只だ可愛がつて下さ

れば……」と、此處に固く約束して、お濱は今夜くるといふ約束であるから
どうか次ぎの間で聞いて下さいといふ、それを聞いて新八郎は大いに喜びて、
酒酌み交して新左衛門のきたるを待ち受けてゐた、何時しか夜に入ると、新左
衛門は二人の子分を連れて歩つてきたが、子分の者は返し、お濱を相手に酒を
飲み、鼻の下を三寸ばかり延してゐる、お濱「時分はよしと、濱「ねゑ親分、
貴君は以前大阪にゐたと聞きましたが、大阪でも矢ッ張りこんな商賣をしてい
らつしやつたんですか、新「イヤ、大阪にゐた頃は堅氣よ、妙なことを聞くぢ
やねゑか、濱「イヤ、妾しの伯父さんといふ人が、大阪の野々村伊豫守様とい
ふお殿様のお屋敷へ奉公してゐましたが、貴君が大阪にゐたと聞いて、伯父の
様子が聞きたいと思ひまして……、黒「手前ゐの伯父が野々村様に……し
て名は何んといふのだ、濱「名ですか、名はそう〳〵可内といふ仲間で……
黒「可内……フム……、聞いたこともねゑが……、濱「では貴君も野々

村様に御奉公していらしつたのですか、黒「そうだ、誰れにもいはねねが實は傳助さいつて奉公してゐたのだ……、濵「へエ……何んでも叔父は話しに野々村様にはそれは〳〵美しいお妾様があつたそうでございますね、黒「ウム、あつた、光枝様と仰しやるんだ、濵「その後伯父からフツツリ頼りがないと思つたら、あの戰爭で野々村様は大阪であるから、とう〳〵討死なされたといふ評判、してその美しい光枝様さいふお方はどうなされましたへ、黒「フム お濵、手前はそれを聞いてどうするのだ……、濵「別にどうするさいふてともないが、そんな美しいお方、今頃はどうしていらつしやるだろうと思つて……、黒「ハツハ……、お前は、余ッ程苦勞性だの……、他人事を聞きたいなんて……、濵「でもそのお妾様に妾しの伯父さんが始終ついてゐたさいふ話しですから、そのお妾様の在所が知れたら、たつた一人の伯父の在所も知れませうと思つて……」と、だん〳〵と聞き糺すと、新左衛門は酒に

酔つてはくるし、どうかしてお濵を手に入れやうとしてゐるので、黒「ではお濵、乃公が話してやるが、決して他人に話してはならねねぞ、濵「何んで話しませう、妾しだつて大阪方に縁者があるさいへば、お上の方に妙に思はれるに違ひありませんもの……、黒「ちやアいつて聞かせるが、その伯父さんさいふ男は知らねね、光枝様さいふのはそれは〳〵美くしい人、あの戰爭が始まる前に、一人の和子をお生みなすつたのだ、ところがあの戰爭、殿様の仰しやるには、この戰爭はどうも大阪方が覺束ない、もしや負ければ大阪方の殘黨さいつて詮議嚴しいに違ひねね、そうすれば生れたばかりの子を殺さねばならぬ、お前は早やく何處かへ逃げて、この子を育て後々家名を立てさせてくれつてやうた譯で、その光枝様が丹後の御親戚へ行かれる、ついては誰れかシツカリしたものがお供をしなければならぬさいふので乃公が供をしたのだ 濵「それはマアよかつた、して今では御無事ですか、新「ところがこれてそ人に話せねね

てさだが、その時分には乃公も年は若ねしの、始終宿屋も二人で泊る、相手は滅法美しいといふんだろう、ツイ謀反氣が起きて口説いたと思ひねね、そうだが何んといつても御主人筋だ、ウンといひつてはねね、だがあきらめられぬが戀の情……丁度ところも丹波福知山の城下手前、庚申堂で休んだときに、執念く口説き立てると、とう〳〵怒つて、女は懷劍拔いて斬つてかゝつたのよもう止そう〳〵、サア一杯酌げ、そんな話しは止め〳〵……、濱「それから大事よ……、黑「何が大事だ、濱「そうぢやありませんか、折角面白いところでブツツリ切つては、後が聞きたいぢやありませんか……、黑「それから先きはいはんてさもねねが、どうだ、お濱、もういゝ加減ウンといつてもいゝぢやねねか」と、さんだところで口説きかゝつた、平生から一も二もなく例ねてしもうさところだが、ヨザさお濱はチーツと考がへ込んでゐた。

○イザ尋常に勝負せいッ

黑駒の新左衛門は已れ計られるとは知らず、どうやら平生に似氣なくお濱が優しいので、圖々しく居り寄り、黑「ガイ、お濱、どうだい……、濱「そりア親分さんの毎度の親切はよく知つてゐますが……マアその話しは皆して下さい、そうして伯父の在所が分つたら……、黑「そいつは無理な話し、乃公アお前ねの伯父の可内といふ人は知らねね、濱「マアその話しをして下さい、黑「それから別に話しもねねが、女の癖に斬つてかゝるから、ツイバツサリよ……、濱「エツ……マア〳〵可哀想に……、ではそのお方を殺してしまつたの……、黑「始めは殺す氣もなかつたが、そうなつてみれば仕方がねね……、濱「ではお前さんは御主殺しだわね、黑「ハツハ……が主殺しなんて、御大層にいふねね、サアどうだ、今夜は何んでも彼んでも乃公のいふて

を聞いて貰はなきア……、滇「いよ〳〵殺したに違ひないと白狀したらそれでいゝでせう、黒ヤイ……、野暮に詰らねねてとな大きな聲でいふな」と いふ折りしも、新オ、聞いた〳〵」と、いひながら、間の襖紙パラリ開けて スイツと這入つてきたのはいはずと知れた野々村新八郎だ、新左衛門も驚ろいて、黒なんだ、手前ゐは……、新「誰れでもない、今貴樣が話して居つた光枝といふ人の一子、野々村新八郎だ、黒「エッ……、ではあのときの……

……、新「サア斯うなつたからには、遁れぬところだ、汝を尋ねて永年の艱難辛苦、イザ尋常に勝負せいッ」と、太刀の鋼に手をかけた、黒オゝそ、吐かせばそれまで……」と、ケイツと側にわつた喧嘩刀を押つとつた、折りしも、役「御用だ……野々村新八郎、神妙にせいッ」と、パラ〳〵ッと現はれ出でし多くの役人、新八郎ハッと思つたが、新ヤア役人、我れは御用呼はり受けろ覺へはない、役「いふな野々村新八郎、汝過日目黒不動尊前に於い

て、上樣に對し、狼藉を働らき、又過日神田蔦屋様に於いて大久保御老公の頭を殴つた覺へがあろう、イデ尋常に御縄頂戴せい」と、いはれて、新「ウム、早や手が廻つたか……、汝れッ、折角の仇、逃がしてなるかッ」と、ドッと飛鳥の如く黒駒新左衛門に斬つてかゝる、さはさせじと役人はさへぎる、新ヤア邪魔いたすかッ……」と、左右に斬つて落す間に、新左衛門、早やくもその場を遁れた、役人は爭そつて新八郎を召し捕らんとする、新八郎は側にあつた酒を手早やく含んでプーッと霧の如く吹くとその姿はパッと消へた、甲「それやり居つたぞ、油斷するな〳〵」と、騒ぎ立てる、新八郎は新左衛門を逃がしてならずと姿を隠したまんま表へとび出すと、突然後方から、乙の「野々村新八郎待てッ」と、姿はみへないが、抱きついたものがある、新「フム……さては忍術遣ひか、猪口牙なッ」と、エイヤッと揉み合つた、大勢の役人聲は聞へるが姿がみへないでウロ〳〵マゴ〳〵、丙「雲霧殿、シッカリ

〜……」その内にドスー……ンといふ物音。三「失策つた……」と、いふと、雲霧三平の姿アリ〳〵と現はれた、此方新八郎は早やくもその場を逃げ延び、章駄天走りに龜住町の黒駒宅へのり込み、表口からドシ〳〵這入り込む、子分の奴は、子「ヘイ、何誰……、新何誰も何もない、新左衛門立ち歸つたか」と、ズカ〳〵入り込む、子「モシ〳〵」と、押へやうとする「新」邪魔いたすなッ」と、蹴あげる、子「ヒ、、人殺し……」と、叫ぶ。その聲に大勢の子分等出てきた、入り違いに新八郎、奥の室へ入り込んだが、少しも新左衛門の姿はみへず、新「ウム、殘念ッ……」と、切齒してゐるとてろへ、又も役人大勢のり込みきたつたので、新八郎は一ト先づ紀の國屋へ引きあげた、酒を注文してグイ〳〵やつてゐた、ところへ歩つてきたのは藝者お濵、濵オ、山野さん、お歸り……、新「オ、お濵どのか、殘念ながら新左衛門をとり逃したが、其女はどうして此處へ……、濵「ハイ、新左衛門は豫

ねて出這入りしてゐる本所割下水の安藤對馬といふお旗本の屋敷へ逃げたに相違でございません……、新「エッ……、割下水の安藤對馬……、有難い、……ヤッどうやら役人が參つたやうだ、怪我してはならぬ、早やく退いて居れ〳〵」と、いふ間に、役人輩はバラ〳〵さあがつてきたり、ガラリ障子を開け、役「御用だ〳〵」と、とびかゝる、新八郎は持つたる盃をパッと投げつけると、その姿は早やくも消へた、役「又やり居つたぞ〳〵……」と、いふ間に、姿を隠したまゝ、新八郎は引ッ攫んでブーン〳〵投げ落した、役「ヤア油斷するな〳〵……」と、紀の國屋の前は早やくも大勢の役人ヒシ〳〵と押し寄せてゐる、新八郎九字を切つて、床の間にあつた花活の水をザブーリ二階から打ちまくと、役人等は、□「ウワーッ……」雨が降つてきた〳〵、△ウワーッ……、大水だ〳〵……」新八郎得意の妙術、忽ち四邊は大水……大川の樣にみへた、役人等は驚ろいて、役「ウワーッ……、深いぞ

〳〵……」妙な恰好をしてさび廻つてゐる、恰かも狐にでもつまゝれたやうな有様、雲霧三平潮やうのり込んでみるとこの始末、三「ヤア者共、何をして居る〳〵……、口急に大水で……、この深さ……コヽコリア堪らん……、役馬鹿奴、何處に水が出てゐる、貴様等は新八郎の忍術にかゝつてゐるのだ、よくみろ〳〵」と、小口からパチーン〳〵横ッ面を殴られて、始めて氣がつくと、なる程水もなにもない、役「ウワーッ……」コリアどうぢや……」と、互いに顔見合はせてキョロリッしてゐる、その間に新八郎はドス〳〵本所割下水の安藤對馬の屋敷へ出かけた、更けたといふ程でもないが、門は固く閉まつてゐる、門戸をドン〳〵と叩き、新「開けろ〳〵、中では門番睡むそうな聲で、門「誰れだ〳〵……、新「大久保彦左衛門の屋敷から參つた、開門〳〵」大久保彦左衛門の屋敷からと聞いて門番は急いで開けると、誰れもゐない、門ハテナ……誰れもゐないが、今のは夢かしら……馬鹿々〳〵しい」と、又も以前の如くピタリ門を閉めた。

○又も取り逃がしたかッ

旗本安藤對馬といへば、千五百石頂戴して、本所旗本組でも錚々たるもので、殊に亂暴極まりなく、水野、近藤、松平の白柄組と氣脈を通じ、白糸組といふのを組織してその頭を勤め、常によからぬてさばかりをしてゐる、新八郎は早やくも姿を隠して入り込むと、どうやら奥の室では酒宴の最中さみへる、甲「イヤ、予の屋敷まで逃げてくれば最早や心配するに及ばぬ、野々村新八郎といへば天下の大罪人、もしやきたらば召し捕つてお上へ差し出してやる黒へエ……、どうぞお願ひ申します……」と、確かに新左衛門がゐるのをみて、がラリ障子を開けてズイッと入り込み、新「ヤイ黒駒新左衛門、貴様何處まで逃げやうとしても逃がしはせぬぞ、イザ尋常に勝負せい」と、いはれ

て、新左衛門はアッと驚ろき、大勢の旗本連はクワッと怒り、安「ヤイッ下郎何ものなるぞッ、天下の旗本の屋敷へ土足の儘踏み込むとは何事ぞッ、それッ……」と、七八人の旗本連中、押ッとり刀でズバーリ〳〵斬りつける、

新「エイッ……邪魔すなッ……」と、左右に投げとばし、新左衛門に摑みかゝらんとする、新左衛門は驚ろいて逃げ出す、新八郎も面倒と思つたが、足で酒をバッとひつくり返すと、その姿はスックと消へた。△「ヤア忍術を遣ひ居つたぞ……、□オイ山雲、何處にゐる〳〵……、山「此處に居ります〳〵、曲者、神妙にせい……」と、新左衛門の後を追はんとする新八郎の後方からカッキーと抱きついた、これぞ近頃安藤對馬の屋敷に食客になつてゐる、伊賀流の忍術遣ひ、山雲五平といふもの、さして忍術に長じてはゐないが、相手が姿を隠した位いは分る、ドッと新八郎にとびついたので、新八郎もハッと思ふと術は破れて姿アリ〳〵と現はれる、旗本連中は勢ひ込んで斬りつける、新八郎も詮方なく三四人斬つて落す、ところへ早やくもその近邊の役人聞きつけ、ドシ〳〵のり込んでくる、新八郎は邪魔になる五平を斬つて落し九字を切ると、妙術にかゝつて、△「ウワー……、大變〳〵、大水だ〳〵……」と、いひながら旗本役人とり交ぜ三四十人の奴等は素ッ裸体になつてワア〳〵騒いでゐる、その間に彼方此方に新左衛門の門衛を探したが、どうしても知れない、新「ウム又もとり逃がしたか、殘念ッ……」と、門外に立ち出でると、役人等は安藤屋敷に狼藉者が暴れ込んだといふので、追ひ〳〵にのり込んでみると、三四十人の人々素ッ裸体になつて、小さな泉水の中へ這入つて、△「大水だ〳〵、苦しい〳〵」と、騒いでゐる、苦しい筈だ、折し重なつてワア〳〵いつてゐるので、人々は驚ろいて小口から引きあげると始めて氣がつき、○「さてはあの野々村新八郎といふ奴の仕業か、恐ろしい奴だ」と、身を震はして恐れてゐた、新八郎は尚ほ屋敷の周圍をグル〳〵探してゐると、

パッタリ一人の女に出會つた、新「オ、其女はお濱どのではないか……、濱「オ、山野さま、して新左衛門はどうなさいました、新「殘念ながら又逃かしたやうだが……、外へは出なかつたか、濱「イエ〳〵外へは出ません、妾しもどうなつたてと心配して先刻から張番をして居りますが……、新「イヤ、中には役人が一杯、今夜は一ト先づ引き上げるとしやう……、濱「そうなさいませ、妾しが屹度樣子を探つてあげますから……」新八郎も驅け廻つて頻りに勞れてゐるので、マサカ紀ノ國屋へ引ッ返す譯にもいかないので、お濱は自分の伯父で、檜網町の大工六藏といふ者の家へ新八郎を案内した、新八郎は氣が張つてゐたから分らないが、何處でどうしたか、足に踏み拔きをしてゐる、休むとチク〳〵と痛み出した、お濱の情けによつて一夜を明かしたが、翌日はどうやら殊の外、痛むやうなので、萬事はお濱に任して一日ゴロ〳〵してゐた、日は暮れるのは早やいもので、早や日も暮れかゝらんとしたとき、何

やら人々が路次口を出這入りするので、新「ハテナ……」と、思ふ內、役「野々村新八郎、御用だ〳〵……」と、大勢の役人、狹い大工六藏の家へドヤ〳〵這入り込んできた、新八郎足の痛い位いには少しも屈せず、今召し捕られては一大事と、新「何を水ッ葉共ッ」と、太刀押ッ取るより早やく左右にズバリ〳〵斬つて落した、路次の中は引ッくり返るやうな大騷ぎ、何しろ狹いところでは働らき憎いので、忽ち表の方へとんで出ると、早や路次の戸はピッタリ閉めて出さない、忽ち新八郎は姿を隱して屋根の上へとび上り、大道に立ち出で、安藤屋敷の方を差してドス〳〵駈けつけると、途中でバッタリお濱に出會つた、新「オ、お濱どの、樣子は如何に……、濱「オ、山野樣……どうして此處へ……、新「イヤ、どうして知れたか、役人が大勢來居つたから、此處まで遁れてきたが新左衛門は如何いたした……、濱「それは丁度幸はひ、今朝から屋敷の周圍を窺かつて居りましたが、少しも知れず、今しか

た旗本大勢と共に屋敷を立ち出で、百本杭から船で向ふ岸へ渡ろうと話しながら行きましたので、急いで知らせにきたところ、早やく〳〵……、新ウム、然らば案内してくれ……」と、お濱と共に両國の百本杭を差して駆けつけろ、何しろ足の痛みも烈しくなつたので思ふやうには駆けられない、お濱は女ながらも健氣に助けて、漸やう百本杭のところまで駆けつけると、早や船は川中へ出た後、新チエッ……、一足遅かつたか……、濱では山野様は早やく橋を渡つて向ふ岸へ……、新「イヤ〳〵、心配いたすな、足は痛んでも大丈夫ぢや……其女は怪我すると不可ん、隠れて居れ〳〵……」と、新八郎は河岸へ立つて口中に何やら唱へて九字を切ると、アラ不思議や、忽ち四邊は眞ッ暗になつたと思ふと、河水はドー〳〵逆波立ち、此方旗本連中や新左衛門のゝつたる船は、次第〳〵に後戻りする、□「オイ〳〵船頭、どうしたのだ〳〵、船は後戻りするではないか、○「ヘエ、この通り一生懸命に漕い

でゐるのですが……」と、いふ内に、船はキリ〳〵〳〵と廻り出した、一同アッと驚ろいて、今にも船は覆へりもそうでつたあが、新ヤア〳〵黒駒新左衛門、如何に逃げんとしても逃がして堪るか、サア尋常に勝負せい」と、いふ聲が聞へるかと思ふと、四邊は以前の如く薄明くなつて、船は何時しか百本杭の岸へピタリ着いてゐた。

○即座に首打ち刎ねられい

一同アッと驚ろいて目ばかりパチ〳〵させてゐる、安「それッ、やつ付けろッ

○「汝ッ……、下郎奴、推参なりッ……」と、旗本連中ズラ〳〵太刀抜き拂つてズバーリ〳〵斬りつけた、新ヤ、悪人に加勢いたす上は容赦いたさぬ、サア來いッ……」と、斬り結ぶ、新左衛門も斯うなるともう逃げるに逃げられず、黒ヤア野々村新八郎、手前ゐは大それた將軍様に狼藉を働ら

き、今更ら仇討ちなど、小癪な寝言を吐かすな、イデ返り討ちにしてやるぞッ……」と、太刀引き抜いて斬りつけた、折りしも彼方の方から人勢の役人、

役　ヤア〳〵野々村新八郎、御用だ〳〵……」と、十重二十重に押ッとり圍んだ、新　サア來いきたれッ……」と、新八郎西角八面に暴れ廻り、早やくも新左衛門を討ちとらんとしたが、役人が邪魔して寄せつけない、新　エ、イッ……、面倒なッ……」と、九字を切ると、役人はドブ〳〵川の中へ落ち込んだ、三「ヤア〳〵者共、曲者の妖術にかゝつて、其方へ參らば川の中へ落ちるぞ〳〵……」と、雲霧三平擊を枯して止めるが、尚はもド、ブン〳〵、アブ〳〵チヤブ〳〵藻掻き廻つてゐる、その内に早やくも新左衛門はコソ〳〵と逃げ出し、五六丁もくると、ヌッと行手に當つて姿を現はした新八郎、新「ヤア傳助、何處へ行く〳〵……」、黒「ヤア此奴……」と、死物狂ひになつて斬りつけたが素より新八郎の敵ではない、肩口一刀ズバーリ斬り

つけられ、アッといつて打つ倒れた、新「ヤイッ……傳助、汝不埒にも主人の恩を忘れ、色香に迷ひ口説き立て、剰つさへ殺すといふのは何事ぞッ、イデ引導渡してやる、覺悟せいッ……」と、太刀振りあげると、黒「ヤア若樣少時〳〵……ッ、新「今になつて何を吐かす……、黒「イエ、實は旦那樣は私しが殺したのではございません、新「ナニ、殺したのでない、何を吐かすそ……、黒「ヤア一通りお聞き下されまし、私しが旦那樣の色香に惚れ込んだのは事實でございますが、途中で一人のお武家に出會ひ、そのお方は以前大阪城内千人勇士の一人として威張つて居られた有松喜四郎といふお方、そのお方が是非旦那樣をとり持て、金子を五十兩やる、聞かねば殺してしもうと威赫かされ、生命をとられるか、金子儲けの二つに一つ、とう〳〵いはれる儘に、旦那樣を庚申堂にお連れ申し、その有松といふ人が口説かれましたが、旦那樣はお聞き入れなく、懐劍抜いて斬りつけ、とう〳〵一刀の下にお斬られなすつた

ので……。新「エッ……ではその有松喜四郎といふものゝために……、してその有松といふ奴は當時何處にゐる……、黒「何んてもその後丹波福知山の稻葉家へ岡本助太夫と名乘つて指南番として仕官なされたさうでございます……」と、いふ折りしも、何處で打つたか、ドヽーンと響きし一發の銃聲彈丸は新八郎の右の太股に命中してアッと叫んで打つ倒れた、新「何奴なるぞッ、卑怯千萬に飛道具を以つて……、三「誰れでもない、雲霧三平だ、イデ尋當に御繩頂戴せいッ」と、組みかゝる、野々村新八郎傷所の痛手に屈せず、三平に組みつき上になり下になりゴロ〳〵爭そつてゐたが、遂に大勢の役人のために八重十文字に縛しあげられ、遂に北町奉行所へ引ッ立てられた、新八郎は右の太股を一發打ち拔かれ、その上大小數ケ所の傷、足には踏み拔きをしてゐる、何しろ傷を負ふてゐるので、直ちに手當てを與へる、流石は天下の豪傑、少しも弱つてゐない、直ちにこのことを御老中に屆け出でる、北町奉行

は翌日引き出していろ〳〵尋ねたが、新「アイヤ、我れは汝等如きに調等られるものでない、城内へ引け〳〵……」と、いつて、その後いくら調べても一句も答へない、其處で役人いろ〳〵評定の上、委細を將軍家に申しあげて、何んといつても容易ならざる天下の大罪人とあつて、いろ〳〵吹上御殿の庭前へ引き出してさり調べるとさゝなつた、さて早やくもその當日になると、町奉行所より駕籠にのせ、もし途中狼籍ものあつてはならぬと、いとも殿重なる警固なし千代田城へ連れてきた、直ちに庭前へ廻はす、此方正面一段小高きところには簾中には三代將軍家光公御着座、その側には御三家を始め、德川幕下の諸大名、その他旗本中連、天下四十八高の役人ズラッとこころ狹きまで扣へてゐる、調べの係りは松平伊豆守、氷野監物、石谷十藏等何れも椽側へ座を占める、やがて新八郎は雲霧三平絆尻をとつて庭前へ設けられたる荒筵の上へ座らせる、係りとして松平伊豆守殿、このお方は智惠伊豆守といつ

て、徳川家には智者も多くわるが、その智者中の智者と呼ばれた人物、伊「アイヤ、それなる野々村新八郎、頭を上げい……」と、いつたが新八郎は始めから恐れ氣も頭をわげてゐる、新　掘者は野々村新八郎さいふものではない、天下の浪人山野小源太と申すものである、伊「して生國は何處ぞ……、新「ハッハ……、今更ら斯く捕はれの身となつてい何をかいはん、即わりと思は即座に首刎ねられい、伊「その方は過日神田萬世橋に於いて、旗本大久保彦左衛門殿の頭を打つた覺へがあろう、どうぢや……、新「イヤ、ない、伊「默れッ、如何に隠し立ていたしても、その方の着物の紋どころが承知せぬぞ、今になつて明白に白狀せぬか……、新「イヤ、何んといはれても覺へはない……、伊「然らば過日日黑の不動尊の前に於いて、上臈お鷹野の節、狼藉働らきしは覺へがあろう……、新「ない」すると、側にゐた石谷十藏、十「默れッ、曲者、汝も見受けるところ、少しは名ある勇士なるに、今になつ

て隠し立ていたすさは卑怯千萬、キリ〳〵白狀せい……、新「イヤ、少しもさる覺へはない」町奉行石木丹波守は、丹「コリア〳〵曲者、今さなつて何故何事も隠し立ていたす、過日萬世橋に於いて大久保御老公に對して狼藉を働らきしは汝に相違なし、彼の町人一心太助なるものは、たしかに汝の着物の紋どころ四ッ目菱の紋をみて、日夜其方を探し居つたのである、今更ら存ぜぬと申さば、重き刑に處すぞ、男らしく白狀せい……、新「イヤ、如何に紋が同じにて、天下に四ッ目菱の定紋をつけてゐるは掘者ばかりでない、掘者に於いては少しも覺へないところ、如何なる重き刑も厭はぬ、早やく刑に處してくれるやう……」と、いつて、尙は交る〳〵さり調べたが、どうしても何事も白狀しない。

○ヤヽッ……其女は春ッ

ときに伊豆守は小膝を進め、伊「然らば汝、何故に旗本安藤對馬の屋敷へ亂入せしぞ、それは確かに覺へがあらう……、新」ある、それは本所龜住町の町人、黒駒新左衛門なるものは、我が生母を殺した仇、八幡社前の料理屋に於いて名乘りをあげて勝負を申し込んだが、卑怯にも逃げ出し、旗本安藤對馬の屋敷へ逃げ込んだり、相當に禮を盡して受けさらんと存ぜしが、役人は何事が想ひ違いをいたして嚴しく追跡いたすによつて、詮方なく忍び込んだり、如何にも黒駒新左衛門その他幾人かは手にかけたり、イザ潔よく刑に處してくれるやうに、その他は如何に問はれても、知らぬ存ぜぬことは白狀出來ぬ、最早陳述する覺へはないと、いつて、交る〳〵とり調べ、その場には大久保彦左衛門もゐて、尋ね問ふても一言一句も實を吐かない、其處で詮方なくその日

は城内の牢へ下げ、嚴しく警固した、それより日々引き出してとり調べてもウンともスッともいはない、一同の役人も殆んど持て余した、何しろ確かに天下の大罪人に違ひないから、御法通り、磔刑又は打ち首の刑に處したらよかろうと、いろ〳〵評定した、いよ〳〵最後のとり調べとして引き出した、又もいろ〳〵とり調べたが、例の通り一言一句も吐かない、流石の一同も持て余してゐる、伊豆守は小膝を進め、伊「コリア山野小源太とやら、その方何人がとり調べても實を吐かぬが、その方は山野小源太と申すが、實は丹波の國落合村の百姓惣助の倅として生ひ育つたる野々村新八郎と申すものであろう」と、いつても答へがない、伊「汝、如何にも覺悟を極めたるは天ッ晴れ、假りにも天下の旗本の屋敷へ亂入なし、多くの人々を殺めたる罪のみにても死刑は免らぬ然し新八郎、汝明白に白狀いたせば、汝の妻子は助命の儀をお願ひ申してやるが、どうぢや、それでも白狀いたさぬか」と、いはれて新八郎、妙なこと

たいふものよ、妻といつては惣助の娘お春、それも同棲したのは僅かに五六日なるに、妻子とは妙なことゝ思つたが、新「イヤ、我れはさるものではない殊に今だ妻はなく、從がつて子もない……、伊「ウム、それまでに申さば、今會はせるものがある、誰かある、次ぎに招へし女をこれへ……、下「ハッ……」と、答へて、下役人が一人の女を連れてきた、その女は一人の赤兒を抱いて恐る〳〵出てきた、伊「イヤ、女、汝の尋ねる瓦人といふはその者であろう、よくみよ……」と、いはれて女は恐る〳〵顏をあげて新八郎の顏をみて、女「オヽッ……貴君ッ……」といふ聲に、ヂッと目を閉ぢて泰然と構へてゐた新八郎、何ものなるかとヒョッとみると驚ろいた、國に殘した自分の妻のお春であるから、新「ヤヽッ……、其女は春ッ……、春「我が瓦夫婦、お懷しうございます……」と、お春は早や涙であつた、然し假りにも將軍家の御前、不思議に思ふは子を抱いてゐることであるが、いふことも尋

ねることも出來ない、互いに愁然としてゐると、その日は又も牢屋へ下げられた、すると間もなく、お春は役人に案内されてきた、役人の立ち去つた後、お春は、春「貴君……」と、いつたまんま早や涙であつた、豪氣の新八郎も、新「オヽ春、其方はどうして此處へきたぞ……、春「ハイ、妾しも貴君にてんなことろでお目にかゝらうとは存じませんでした……、新「イヤ、泣いて居つては分らぬ、委細を話してみよ……、春「ハイ、何事も御存じない貴君樣でございますが、貴君が御出立後間もなく、あの岡本助太夫のために兩親は殺され、妾しは危ふく逃れましたので……、新「エッ……、あの助太夫のために……、春「ハイ、それよりどうかしてこのことを貴君に話して、仇を討つて頂だきに、名主樣に話して早速國許を差して發足、漸やう大阪まで參りますと、惡者のために既に辱かしめられんとしたところを、或る情ある方に助けられ、暫らく御厄介になつてゐる内に、どうやら今まで身体の具合が

悪いと思つてゐましたのは姙娠と知れましたが、切めては貴君に會ふまではと又も大阪の地を出立、江戸へ差してくる途中、彼方此方で日を費やし、いろ〳〵苦勞艱難いたしまして、岡崎の宿山村屋仙右衛門といふ宿で、ドッと病いの床に臥し、持ち合はせのお金子も殆んど使ひ盡し漸やうこの子を生み落しましたので……、新「エッ……、ではこの子を……。巻「ハイ……、何んといつても旅の主……名も新次郎とつけましたが、どうやら噂さに聞けば貴君様は江戸の方にお出でとのこと、人さんの止めるのも聞かず、宿の御亭主の情けに十両の金子を頂戴して道中してゐる内、後こは眼病を患らひ、その困難は一通りでなく、どうかして一日も早やく江戸まで行きたいと、みへぬ目にこの子を脊負ひ、漸やう江戸まで參りましたが、又も悪者のために捕へられしところを、或る立派なお武家様に助けられ、それよりはそのお屋敷で有難いお手當てを下されましたので……、新「立派なお武家様とは……、巻「漸

やう眼病が直つて聞けば、あの松平伊豆守様といふお殿様、それは〳〵勿体ない程大切にして下さいまして、或る日身の上をいろ〳〵に尋ねられましたので、委細殘らず申しあげると、それは可哀想に、何れは會はしてやるから、暫らくは養生して居れとのお言葉、今日此處で貴君にお目にかかろうとは存じませんでした」と、涙と共に永々と物語つた、聞く新八郎ゝ身にヒシ〳〵と堪へ、新「ウム、そうであつたか、そんなことゝは少しも知らなかつた……、ヨシ〳〵兩親を殺した岡本助太夫……、といつてこの身は到底逃れぬ身体……、ウム、お春……、巻「ハイ……、新「我が身がかゝる罪人となつてゐるのは不思議に思ふであろうが、實は云々斯々の身の上……、我れは最早や德川御法を遁れぬ身体、たとへこの身は刑に處せられ、つながる縁で其女までも……、巻「イエ〳〵、妾しア貴君に合へばこの上望みはなく、そうしたお身の上のお方と相存じぬ、百姓の娘が一日なりと貴君様のお情け受けし

身は勿体ない、たとへての身はどんな刑に處せられるともお嬉しうございます……、新「ウム、よくぞ申した、それでこそ新八郎の妻ぢや、それにしても可哀想なのはこの新次郎……、春「旅中で……ロク〳〵お父様のお顔も知らぬ内……」と、夫婦互ひに愴然としてゐるところへ、役人がきて二人を分けて、お春を何處へか連れ去つてしまつた。

○これぞ冥途までの怨ぢや

後に獨り獄中に思案にくれてゐた野々村新八郎お家のため、父兄のために德川家を倒さんとした雄々しき心も、妻子に合ふたゝめに碎けんとしたが、心をとり直し、新「不運にも斯く捕らわれの身となつては如何ともする事叶はねども……、功めては殘る仇、あの岡本助太夫さいふ奴を討ちたいものである」とその夜幾度か夢におそわれて目を覺ましたが、早やくも夜は明け離れ、少時す

ると再たび引き出された、役人は以前の通りであつたが、その日伊豆守は嚴然として、伊「ヤヨ新八郎、最早や上を偽はるところもあるまい、其方は大阪方の殘黨、野々村新八郎と申し、過年東海道濱松附近に於いて、外二人のものと藤堂殿の行列に對して狼籍を働らき、又江戸に於いて大久保殿に亂暴を働らき、且つ上様に對して狼籍を働らいたであろうどうぢや」妻子を枷に責苦　新八郎は飽くまで何事もいはず刑に就かんと思つたが、今は潔よく白狀いたして刑につかんと心を定め、新「イヤ、今日までは無言の儘に死を望みたれど、さまで問はれるならお答へ申さん、何をか隠さん、我れは大阪七手組の一人野々村伊豫守の落亂、野々村新八郎安種と申すものである、如何にも東海道以來の出來事は覺へあり……、伊「して何んの怨みあつて、藤堂殿、大久保殿、さつた上様に對して狼籍を働らきしぞ……、新「いはれなき松平殿、貴殿は德川家第一の智者といふに何故豊臣殘黨を嚴しく詮議されるぞ、よしや殘黨

にして我れ等如きものは別として、涙々としてその日微々として送るものさへ引き出して重き刑に處すといふ德川家の不法、第一藤堂公如きは豊臣恩顧第一の大名、如何なる事情ありといへども、豊臣家に對して弓引くといふは、人面獸心といはれても是非もなく、イヤ、藤堂公ばかりでなく、その邊に並ぶゐられる諸大名の中でも、その身は直接ならずとも、父兄は豊臣家の重恩を受けしものも多からんと思ふ、それに一言も豊臣家のために辨ぜざるを以つて別に藤堂家を獨り怨むでゝはないが、大老職にあるを以つて只だその旨をいひしのみなり、又大久保彦左衛門殿を毆つたと申すが、假りにも天下旗本の身を以つて、町人の無禮を咎めず、却つて町人に加擔なし、その上馬蹄にかけられんとせしによつて打ち懲らしたり、又將軍家の御身を討たんとせしは、いふまでもなく豊臣家の仇、又一つには父、兄の仇、功めては一ト太刀なり報いんとしたのである、最早やこの上いふところもない、斯く次第に身体の疵所も癒

へてくれば、かゝる繩目位い脱するはいとも容易なれど、今更ら決して卑怯なことはせず、素より重き刑に處せられるは覺悟の前イザ〳〵……」と、古臭いが、立板に水を流すが如く滔々として辨じ立てた、これを聞いて側にゐた雲霧三平、三「イヤ、小癪な寢言、汝如何に忍術を心得てゐるといひながら、斯く我れ等が縛りあげた繩目を逃れるは容易なもゝは大言な、今更らそんな世迷ひ言を申すな、折角の其方の名が廢るぞよ、新「ハツハ……何をかならざることをいはん、嘘と思はゞみよツ」と、全身に力を入れ、新「ウム……ヤツ……」と、叫ぶと、幾重にも縛つてあつた繩目はプチ〳〵ツと音を立てゝ下の方の繩は切れ出した、これには一同アツと驚ろいて下役人共はバラ〳〵ツと立ち寄る、新八郎はカラ〳〵と打ち笑ひ、新「ハツハそうまでゐる、監、ウム、天ツ晴れなる覺悟、汝如何に陳述しても、德川家に於いて

は飽くまでも豊臣家の殘黨を殺しく詮議なし、もし徳川家に隨從してゐるものは兎も角にも、その他の者は悉く刑に處すの方略である、重き刑にも處すべきところなれど、上樣格別のお情けを以つて、只今此處に於いて打ち首の刑に處す、有難く心得い」と、水野監物より申し渡した、新八郎に於いては、豫ねてより覺悟を極めてゐる野々村新八郎、少しも惡びれず平然と抑へてゐるすると新八郎を召し捕つた功により首斬りの役は藤衛家の雲霧三平に仰せつけられた、三平は意氣揚々として進み出で、白鞘の太刀ズラリ引き拔き、三「イデ野々村新八郎、上樣御命によつて拙者が素ッ首打ち落してくれる、覺悟せいッ……、新「ウムッ……如何に徳川家とはいへ、名もなき卑夫下郎のために首を落さるか、これぞ冥途までの怨ちや……、三何をッ……卑夫下郎とは……」と、早やくも振りあげたる一刹那、△「少時〳〵……」と、大音聲、遠邊に響くばかりの大聲をあげて進み出でしは余人ではない、駿河

臺の老人大久保彦左衛門である、何んといつても天下三大音聲の一人であるから、その聲の大きいことは驚ろくばかり、三大音聲といふのは、豊臣秀吉、福島家の家臣であつた大橋茂右衛門、この大久保彦左衛門と三人、戰場萬馬の間で號命をかけると、一里四方も聞へる……、マサカそんなでもないが、兎に角大聲で有名である、彦左衛門が少時〳〵といつて止めたので、一同ハッと思ひ、三平も振り下す手を待つてゐると、彦左衛門はスル〳〵ッと座の中央まで出で、御簾の方に一禮して、大「上樣……どうぞ少時この仕置きお待ち下されますやう……、家「ウム、考慮か、何故止めだていたす、其方に對しても無禮いたしたと申す奴ではないか、大「ハイ然し假りにもこの彦左衛門の頭を殴るといふのは、容易ならざる奴、殊に上樣の御身の上を付け狙ひし曲者、彼れが申す通り雲霧三平で首を落すといふは如何にも輕々しき御命、彼れ仕置きの儀は篤と考がへた上いたしたがよろしかろうと存じまする」と、い

つてゐるところへ、大老藤堂和泉守高虎公、高恐れながら……大久保氏のいふ通り、今一日の猶豫の程を……」と、兩人から頻りに願ひ出でる何しろ兩人とも新八郎のためには酷い目に會つてゐる人物、家光公に於いても何んと思はれたか、家「然らば今日は和泉、其方に彼の者は預けおくぞ」と、いふ御命、和泉守は有難く心得、早速新八郎を我が屋敷へ引かせた、後に一同大評定、議論は二手に分れた、水野監物始め一同は、假りにも上樣へ對して無禮を働らきし曲者、打ち首位いでは輕い、中には磔刑に處せよとわり、又一方藤堂和泉守、大久保彦左衞門等の人々は、彼れは世にも珍らしき豪傑、ムザ〳〵殺すも惜しきもの、どうかして心を飜がへさせ、德川家に隨身させたがよかろうといふもの、然しこれは甚はだ小數で、松平伊豆守等は妻子の罪だけは許し、何んといつても天下の大罪を犯せしもの、その儘にも捨ておかれねば、打ち首にするがよかろ」と、議論サマ〳〵容易には決しなかつた、

その間新八郎は藤堂の屋敷へお預けといふことになつた。

○情の枷は脱することは出來ぬ

此方藤堂家に於いては、過年の怨みを捨てゝかいさも丁寧なるとり扱かひ、縛を解き、立派な一室を與へ、酒肴を出していろ〳〵の馳走をする、然しそれは内密、表面は諸士嚴重に監視してゐる、新八郎に於いては今までとは異なり、丁寧な待遇を受け、言葉は一言も發せぬが、禮儀正しう扣へてゐる、或る日のこと、和泉守高虎公は新八郎を目通りへ召した、高「オ、野々村新八郎、久し振りであるのウ……、新「ハッ……、高「過日其方のために行列を亂されたが、聞けば其方は得難きの勇士の由、殊に其方の父野々村伊豫守には至つて懇親な間柄、我れ豐太閤殿下の恩義を忘れてゐるものでない、然し彼の秀頼の御母公淀君、又大野織田の輩さ全然

心合は安、大阪方を見限りし次第、一時其方の振舞ひに立腹したれど、今は怨みを捨てゝ、是非とも其方の一命を救ひとらせんと、彦左衛門と共に上様に助命の儀を願ひ出でたれど、反對黨の者多く、いよ〳〵其方を打ち首にいたすと定まつたれば、今日は予が心盡し、一献酌まんと思ふ、それゞ者共、用意せい……、近「ハッ……」と、答へて、家臣は用意の酒肴をとり出した、新八郎も怨みに思ふ藤堂和泉守と大久保彦左衛門の兩人が助命を申し出てゐると聞いて不思議に思つたが、新「イヤ、御前の心盡し有難く頂戴いたす、然し今になつては死は元より願ふところ、さりながら一刀報ゆることの能はざりしは、よく〳〵殘念な次第でござる……」と、ホロリと一滴、かゝる勇士の一滴は實に千萬無量の感があつた、高「イヤ、幸運なる將軍家、今更ら其方も恨むこともない」と、いつてゐるところへ一人の家臣、□「ハッ……我が主君へ申しあげます……、高「何事ぢや……、□「只今御門前へ、兩名

の武士きたり是非一同野々村新八郎に會はせてくれと申しますが、如何とり計らいませう……、高「ウム、上様より預かつたる新八郎……、よい〳〵、此處へ通せ……、□「ハッ……」と、答へて引き退つたが、やがて庭前の方へ案内に這入つてきたのは、渡邊大角齋、和泉大六の兩人、主從は互ひに顔見合はせて、新「オヽ……、二「オヽ……御主人様、お懐かしう存じまする……」と、兩人はその場に平身低頭した、高「オヽ、新八郎、この兩人は何者なるぞ……、新「ハイ、私しの家來、渡邊大角齋、和泉大六と申します……、高「ウム、家來と申すか、然らば少時別れを惜しむがよかろう、新「ハッ……有難うございます」この寛大なる處置に新八郎は心から嬉しく高虎に厚く禮を述べた、高虎公は家來を引き連れて彼方の部屋へ立ち去られた後には主從三人、互ひに早や目に持つ涙、新「ようぞきてくれた、どうして此處へは……、大「ハイ、御主人の御命、傳助といふものを尋ねながら、奥州

會津まで參り、少時待つてゐる内に闘らず渡邊に會し、貴君をお待ち申しましたが、少しもお出でなく、それより兩人忍び忍んで江戸の地へ參りまするとお主人のお噂さを聞き、失策つたと思ひ、もしや刑場へ引き出されるときは、是非とも奪ひ返さんと待ち受けましたが、チラリ當屋敷にお在でになると聞いて歩つて參りました……、新「オヽそうであつたか、云々斯々……、遂に仕損じて斯く捕はれの身となつた……、渡「だが御主人、豫ねて忍術の極意、この位いのところを逃げ出す位いは何んでもでございますまい……、新「イヤ、たとへ金城鐵壁の内に捕へられるとも、身体さへ無事なれば何んでもないこと、殊に傷所の痛みも大分癒へた今日……、然し縄目や獄屋は脱することが出來ても、情けの柳は脱することは出來ぬ、我れは近日刑に行はれて、最早や武運に盡きたるこの身、何もいひ殘すこともないが、まだ仇を十分討ちとつたといふのではない、それに我が妻子に久々で巡り合ひ、聞けば養父母も

同じ奴の手にかゝつて相果てしとやら、返す〳〵も憎くきは岡本助太夫と名乗る奴、汝等は豊臣殘黨と詮議のかゝらぬ内、この江戸の地を遁れ、我れの代りにその者を討ちとつてくれるやうに……、二「ちやと申してこの儘……新「イヤ、氣の弱いことを申すな、汝等まで召し捕られては誰れが仇を討つべき、サヽ早やく參れ〳〵……、二「ハッ……」と、答へても立ち兼ねてゐるところへ、高「アイヤ、新八郎、少時待て……」と、高虎公は多くの家來を連れて現はれ出た、一同ハッと引き退る、ところへ大久保彦左衛門も出て參り、大「オヽ野々村新八郎、善こそ〳〵、私しはお前に頭を毆られて余り心地よくは思つて居らぬ……、然し私恨によつて大事を過るやうな私しではないぞ〳〵藤堂殿と兩人で頼りに其方の助命の儀を申し出で、ヤッとお許しが出たのぢや……、新「エッ助命……、大「そうぢや、一時當家へお預けといふことになつたが、どうぢや、徳川家寛大なる處置、その方も心を飜かへして徳川

家に仕へてくれ」と、いふ意外なる言葉、新「イヤ、御厚意の段は有難うでさいますが、假りにも將軍家に對して危害を加へんとした拙者、どうぞ御法通りに願ひたい……、大「イヤ、今更らその やうなことを申しても始まるものでもない、よく考がへて德川家へ御奉公せい〳〵、コレ〳〵女、早やふ會ふてやれ〳〵、女ハイ……」と、現はれたのは女房お春でわつた、新「オヽ其女は……、春「ハイ、お殿樣のお情け、大久保樣と御一緒に……、大「ヤア夫婦、主從が揃ふて芽出度い〳〵、然し野々村、伊豆殿の情けにも報ひねばなるまい」と、いはれて、野々村新八郎は更らに答ふる言葉もなかつた、春マアユル〳〵物語りせい、大久保氏、彼方へ一献酌まん……」と、又も和泉守は彦左衛門と共に彼方へ去られた、後に新八郎は腕組み合はして悄然としてゐる、前には女房お春子供を抱いて涙ぐみ、二人の家來も頭を低げてゐた、新「アヽいよ〳〵德川家のために恩義を被せられたか」それより二人の家臣にお春

を紹介した、然し何んといつてもまだお預けさいふことであるから、同居することは出來ない、新八郎は藤堂の屋敷にあるが、妻お春、家來の兩人は大久保屋敷にお預けになつた、新八郎はいろ〳〵德川家に從がふやうに勸められたがナカ〳〵返事をしなかつた、然し助命の恩義、その他いろ〳〵の恩義もあるので、德川家の客分さいふことになつた、其處で天下晴れての身となつたので藤堂和泉守、松平伊豆守、大久保彦左衛門の厚意によつて、神田錦町に立派な道場を搆らへ、旗本連中に武術の指南をした、其處で夫婦主從はお喜び、その後黑駒新左衛門は重傷のために間もなく死去したと知れたので、新八郎は藝者お濱を呼んで厚くその恩義を謝し、丁度和泉大六が獨身でわつたから、これの妻にとり持つた、元より兩人とも承知して、道場の主となり自分と渡邊大角齋は後見となつて武術を教へ、尙はいろ〳〵仇の樣子を探

るさ、どうやら仙臺伊達家に大島三右衛門といふて仕官してゐるのが岡本助太夫らしいといふので、道場は大六に任しておいて大角齋供に連れて、仙臺の地へのり込み、伊達家に委細を申し入れた、其處で伊達家に於いても快よく承知して尋常の勝負をさせ、遂に芽出度く本懷を遂げ、再たび江戸の地へ歸り始めて新八郎は大六、大角齋の兩人を供に連れ、彦左衛門の案内で千代田城へ登城して、將軍家のお目通りへ出で、助命の御禮を申しあげた、家光公も御覽になるさ、三士とも勝れたる立派な骨柄、大いに輕母しく思し召され武術を御所望になる、三士とも快よくお受けいたし、新八郎は得意の水遁の術、奇々快〳〵たる秘術、渡邊大角齋は例の四十貫の鐵棒の遣ひ分け、大六は山中修業の身輕な業や、一刀流極意を御覽に入れた、何れもその非凡なる業に舌を捲いて驚ろいた、その日はいろ〳〵の品物を玉はり、大いに面目を施こして引き下つた、其處で新八郎、大六の兩人は、直ちに三國山にある父大八郎及び妹靜

江を呼び寄せた、德川家に於いては是非とも三士仕官するやうに仰せあつたので、新八郎だけは固く辭し、自から好んで藤堂家の客分といふことになり、大角齋、大六の兩人を推擧した、兩名八百石の高祿を以つて旗本の列に加はり、改ため渡邊大角齋は父の名跡を嗣いで源太左衛門と改名なし、大六の妹靜江を迎へて妻となし、兩家は重く用いられた、新八郎夫婦は少時大六の道場にゐつたが、一ト先づ歸國なし、養父母や又生母の大法會を催ふし、後津の藤堂家へ參り、一萬石の格で客分となつて暮らしてゐる内、惜しや新八郎は三十才の當時不圖病魔のため犯され、惜しや遂にこの世を去り、聞く人々誰れしも惜しまぬものはなかつた、お春は一子新次郎を養育して、野々村の家名を嗣ぎ、十五才の春一千石の知行を玉はり、改ためて藤堂家の家臣となり、その後永く野々村家は主家の藤堂家と共に榮へ、新次郎は隼人と改名、三千石の家老

となつた、まづこの邊で一先づ筆を止めて置く。

豐臣殘黨水遁の術　野々村新八郎　終

大正七年五月十五日印刷
大正七年五月二十日發行

著者　雪花山人
大阪市東區博勞町四丁目十三番地

發行者　立川熊次郎
大阪市南區大寶寺町中之町三十番地

印刷者　田中松之助

（定價金貳拾五錢）

著作權所有

發行所　大阪市東區心齋橋通博勞町四丁目
立川文明堂
電話南三〇九四番
振替口座（大阪）一四六一番

一一 休禪師
二二 塙團右衛門
三三 水戸黄門
四四 田新八郎
五五 大久保彦左衛門
六六 石内藏助
七七 荒木又右衛門
八八 關口彌太郎
九九 岩見重太郎
一〇一〇 真田幸村
一一一一 羽柴筑前守
一二一二 大石東下り
一三一三 最明寺時頼
一四一四 佐倉宗五郎
一五一五 太閤と曾呂利
一六一六 真田諸國漫遊
一七一七 宮本武藏
一八一八 井上大九郎
一九一九 後藤又兵衛
二〇二〇 久保漫遊
二一二一 ロビンソン漂流記
二二二二 伊藤彌五郎
二三二三 堀部安兵衛
二四二四 奈
二五二五 木下藤吉郎
二六二六 木村又藏
二七二七 柳生旅日記
二八二八 岡左内
二九二九 西郷隆盛
三〇三〇 豐臣秀吉
三一三一 塚原卜傳
三二三二 寛永御前試合
三三三三 山中鹿之助
三四三四 荒川熊藏
三五三五 水戸關西漫遊
三六三六 乃木將軍
三七三七 明烏十勇士
三八三八 飛佐助
三九三九 苅萱石童丸
四〇四〇 猿
四一四一 休頓智奇談
四二四二 由井正雪
四三四三 水戸九州漫遊
四四四四 豐太閤
四五四五 鳴呼忠臣補公
四六四六 同小楠公
四七四七 丸橋忠彌
四八四八 水戸三郎丸
四九四九 野鹿藏
五〇五〇 大阪城冬陣
五一五一 大阪城夏陣
五二五二 信玄と謙信
五三五三 羽賀井一心齋
五四五四 兎小島彌太郎
五五五五 霧隱才藏
五六五六 豐公御前試合
五七五七 牛若と辨慶
五八五八 血染の聯隊旗
五九五九 毛谷村六助
六〇六〇 三好清海入道

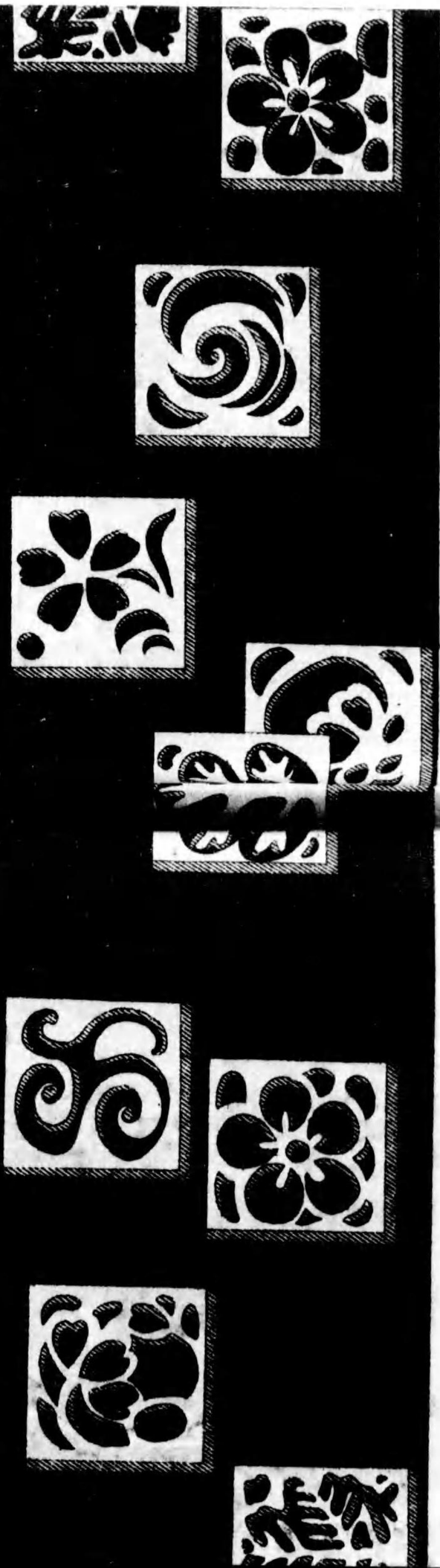
（天金クロス製　立川文庫　定價金廿五錢）

六一六一 水戸東海漫遊
六二六二 由利鎌之助
六三六三 飯田八郎
六四六四 柳川庄八
六五六五 樋口十郎左衛門
六六六六 紀州三郎丸
六七六七 秦野三勇士
六八六八 赤星太郎兵衛
六九六九 石川虎次郎
七〇七〇 尾張三郎丸
七一七一 西遊記孫悟空
七二七二 同三藏法師
七三七三 上泉伊勢守
七四七四 後藤又一郎
七五七五 安部晴明
七六七六 吉岡兼房
七七七七 小野治郎左衛門
七八七八 源頼光
七九七九 竹内加賀之助
八〇八〇 阪田庄三郎
八一八一 戸澤山城守
八二八二 塚原左傳
八三八三 飯篠山城守
八四八四 諸岡一羽齋
八五八五 柳生中國漫遊
八六八六 血槍九郎
八七八七 高木折右衛門
八八八八 筑紫市兵衛
八九八九 石口八郎
九〇九〇 松平長七郎
九一九一 松平關西漫遊
九二九二 後藤小源太
九三九三 猿飛漫遊記
九四九四 犬上刑部
九五九五 犬若五郎左衛門
九六九六 近藤無手之助
九七九七 百々地三太夫
九八九八 渡邊槍半藏
九九九九 柳生九州漫遊
一〇〇一〇〇 南岳坊俊明
一〇一一〇一 新宮左馬助
一〇二一〇二 猿飛南海漫遊
一〇三一〇三 神宮伊豆
一〇四一〇四 熊野太郎
一〇五一〇五 熊田甚五兵衛
一〇六一〇六 永井源三郎
一〇七一〇七 筑紫市兵衛
一〇八一〇八 猿飛江戸探
一〇九一〇九 大久保九州漫遊
一一〇一一〇 花房主水
一一一一一一 梵字太郎
一一二一一二 柳生又十郎
一一三一一三 淺山一傳齋
一一四一一四 寺西閑心
一一五一一五 穴澤大八郎
一一六一一六 本多平八郎
一一七一一七 甲賀雷助
一一八一一八 神力庄吉
一一九一一九 猿飛東北漫遊
一二〇一二〇 霧隱才藏漫遊

278
1352

（天金クロス製　立川文庫　定價金廿五錢）

一三甲賀東國漫遊　一四一猿飛小源吾
一三魔風來太郎　一四三木村小源吾
一三後藤漫遊記　一四三霧隱小源吾
一三四坂田小金吾　一四四蟹江才助
一三五猿飛大活動　一四五桂小太郎
一三六霧隱大活動　一四六荒浪龍之助
一三七荒獅子五郎　一四七天津小源太
一三八鞍馬八郎　一四八後藤又十郎
一三九島津熊若丸　一四九霧島小二郎
一三〇前田犬若丸　一五〇羽黑太郎
一三一伊達梵字丸　一五一筑波太郎
一三二鞍馬八郎諸國漫遊　一五二秋葉太郎
一三三鈴木菊若丸　一五三薄田小隼人
一三四御嶽八郎　一五四北畠玄吾
一三五眞田小太郎　一五五十文字新九郎
一三六武田五郎　一五六筑紫三勇士
一三七鈴木菊若丸九州漫遊　一五七長曾我部男龍丸
一三八通力太郎　一五八金子夜叉王丸
一三九勇婦綾路　一五九加藤右馬助
一四〇村雨雷太郎　一六〇猿澤飛助
一六一直江山城守　一六二塙雷藏
一六三斑鳩平次遊　一六四堀帶刀
一六五熊谷鬼王丸　一六六立花光若丸
一六七百々地八郎　一六八武田猛智丸
一六九山縣鬼玄蕃　一七〇馬場八郎
一七一巖上寺熊太郎



終